

皇居お堀の浄化作戦

水質悪化が深刻化している皇居のお堀を浄化する取り組みが始まった。皇居近くのオフィスビルの地下に浄水装置を設置し、お堀の水をプールのように循環させてきれいにしようという試みだ。「大手門タワー・JXビル」2015年11月竣工の地下に設置された、お堀の水を浄化するための施設からお堀に水を入れる。

環境省所管の皇居外苑の濠は、桜田濠、凱旋濠、蛤濠、半蔵濠、千鳥ヶ淵、牛ヶ淵、清水濠、大手濠、桔梗濠、和田倉濠、馬場先濠、日比谷濠の12の濠から成り立っています。その総面積は37万㎡で東京ドーム約8個分。平均水深は1.25m、総湛水量は約45万㎡にもなります。(このほか、皇居には宮内庁の管轄する濠があります)

取り組みを主導しているのは大手町・丸の内地区に多くのビルを所有する三菱地所。内堀通りを挟んで皇居外苑濠(お堀)にかかる大手門の目の前にあった「りそな・マルハビル」(千代田区大手町)の跡地を再開発し、新たに建設した大手門タワー・JXビル(地上22階、地下5階)の地下に浄水装置を設置した。内堀通りの地下を通したパイプでお堀から取水し、水をきれいにしてから再び放流する。不純物の90%を取り除く能力があり、年間50万トン浄化することが可能だ。

お堀の水量は45万トンで、同社担当者は「1年かけてお堀全体の水を浄化する」と説明する。皇居のお堀は、玉川上水の淀橋浄水場(東京都)で余った水が放流されていた1960年代前半までは、水が循環して一定の水質を保っていた。ところが、65年に同浄水場が閉鎖されて西新宿の再開発が始まると水がよどみ、とりわけ雨が降らずに水量が少なくなる夏には、アオコの大量発生が深刻化し、濃い緑色の水は時に異臭を放つこともある。

三菱地所にとって大手町・丸の内地区は、かつて「三菱村」と呼ばれたいわば三菱グループ発祥の地。90年代には都庁の新宿移転などで地盤沈下の進んでいた同地区を、その後の再開発でよみがえらせた実績があり、今回の「お堀浄化作戦」にも並々ならぬ意気込みを見せている。ただ、浄化を進める理由はそれだけではない。もう一つの背景として、環境の改善提案などをした事業者に対し、再開発ビルの容積率や高さ制限を緩和することを認める都市再生特別措置法もある。三菱地所は浄化装置を自前で設置して稼働させる代わりに、再開発ビルの容積率を通常1300%から1400%に緩和してもらった。

その分、ビルの総面積を広げてテナントに貸せば、もとは取れるというわけだ。すぐ近くでは、三井物産ビル跡地の再開発(19年度完成予定)も進む。こちらは緑地や池を含む6000平方メートルの広場が整備される計画だ。予定地には以前、人工池があり、この池で繁殖したカルガモ一家が皇居お堀へ引越す姿が日本中で話題となったが、同様の光景が再び見られる日が来るかもしれない。企業にとってこうした環境整備は、再開発地周辺の価値を高める効果も期待できる。都市緑化に詳しい東京農大の阿部伸太准教授は「木陰にランチに行くなど、都市の中の水や緑を求めての集客効果も発生するのでは」と指摘する。一帯の地権者で作る「大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会」の金城敦彦事務局長は「お堀の底が見えないのが常態化していたが、今後はきれいになって、国内外から来る人に誇れる魅力的な街になるのでは」と期待する。【種市房子】

